

数寄雑談 (2)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学経営学部人文科学研究室 公開日: 2013-05-22 キーワード: 作成者: 渡辺, 誠一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14627

数寄雑談(2)

町衆の美意識

文禄元年(一五九二)前後に成立したと云われる『等伯画説』は、表題の題簽の下に「長谷川等伯の物語を記し」とあるように、京都本法寺の第十世日通上人が等伯から聞いた絵画に関する話を書き留めたものである。等伯五十四歳、日通上人四十三歳頃の記録である。

この画説は「二つの意味で重要である。一は長谷川等伯という桃山時代のすぐれた画人が有していた芸術的教養と芸術観とが披瀝されているといふ点において、二は絵画という芸術についてまとまって語られた我国における最も古い資料であるといふ点において、興味深い多くのものを蔵しているからである」(『等伯画説綜説』)。

最初に明兆、如拙、周文、雪舟、等春へとつながる系譜が記され、次に雪舟に関わる説明があり、雪舟、等春、等伯への系譜が示され

渡辺誠一

ている。

この『等伯画説』の半ばに、堺の町衆水落宗恵が梁楷の柳鳥図を見たときの様子を伝える一条がある。

辰卯月廿六日二堺宗恵来 是ノ梁楷カ柳ニ鳥ノ絵ヲ見セタレハ、
嗚呼しつかかな絵て有御座トほめたり 一言ナレトモ面白ほめや
う也

此絵枯木ニ雪ノフリテ小鳥ニハかかみ居タル所也
雪ハしつかなる物ナレハ尤也

付之思ニしつかなる絵いそかわしき絵等心い、い、いを付而可感事也
八軸ノ内 夜雨 鐘などはしつかナルヘシ 市ノ絵ハいそかし
かるべし

惣雨月ナトハしつかなる物ソ

『等伯画説』の存在は『美術研究』創刊号(昭和七年一月)に活字に附せられるまで、その存在は世に知られていなかった。しかし

「昭和のはじめに至って故土田杏村氏に端を発した等伯研究は、更に土居次義氏等のたゆまざる努力によって著しく深められると共に、等伯の画家としての評価も大きく変化して来た。〈美術研究〉の等伯画説の校刊も、この機運に寄与するものであった」（『等伯畫説綜説』）。

『等伯画説』のこの一節は、昭和の美術史家、原豊宗、山根有三、松下隆章、脇本楽之軒などによってさまざまに論じられたことがあった。

この一節はすべて等伯の言葉であるとする者、この部分だけは日通上人の言葉であると看做す者など様々であった。しかし、この文章は次のように解釈するのが妥当であろう。

文禄元年（一五九二）四月二十六日、堺の水落宗恵が京都市本法寺の日通上人を訪れた際、上人は所蔵の梁階の「柳に鳥」の絵を見せた。すると、宗恵は「ああ静かな絵で御座いますね」と称賛した。この言葉を聞いた日通上人は、わずか一言の批評であるが、「おもしろい褒めようだ」と感心した。この時傍らに等伯がいたのである。「雪は静かものであるから尤もなことである。このことから思うに、静かな絵、忙しい絵などと心して実感すべきことである。玉潤の瀟湘八景図の瀟湘夜雨・煙寺晚鐘などは静かな絵である。山市晴嵐は忙わしいものである。総じて雨月などは静かなものである」と等伯が付け加えた。

宗恵は、「柳に鳥」の絵を見せられた時、そこに描かれている姿・

形や題材から右のような感想を述べた訳ではなく、絵を見た瞬間に訴えかけてきた梁楷の叙情性（こころ）、その寂寥感に心打たれたのである。日通は「しつかなる絵」という表現に驚嘆したのであるが、等伯にとってこの表現は珍しいものではなかった。従って右のような説明をしたのである。

この一条では、日通上人が「心を付而」に傍点を付けていることから判るように、「心を付而可感」という絵画の観方を得得し、それに開眼したことが伝えられている。「心で観る」は、当時の茶人たちの美意識であり、日常語で絵画経験を語る堺町衆の鑑賞法であった。

室町時代前半の茶の湯において、唐物道具が貴重品視され、特別に扱われていたが、唐物の鑑賞態度、その見方は極めて形式的であり、その道具の表現内容をどれだけ理解して鑑賞していたかは疑問である。高価で珍奇であることが貴重で優れた道具という見方であった。室町時代後半になっても、その鑑賞の態度は前代とあまり変わることなく、ただ唐物であるということだけでその作品の表現内容とは別の尺度で鑑賞されていたが、堺の町衆は別であった。

堺の町では多くの町衆が、明や南蛮との貿易で富裕となり、その財力にものをいわせて、唐物の茶道具を買いあさり、それを使って茶の湯という閑寂な世界を楽しんでいた。従って同じ唐物であっても、それぞれの道具がそれぞれの個性をもっており、それぞれ異なった印象を与えることを承知していた。茶の湯で鍛えられた鋭い鑑賞

眼をもっていたのである。特に津田宗達を父に持つ宗及は、優れた鑑賞眼を有しており、独特の言葉を使って道具の持ち味を評価している。

例えば、永禄十二年（一五六九）正月十一日朝、津田宗及は同族の了雲・道叱と共に博多宗寿の茶会に招かれた折、宋の徽宗皇帝の「鴨絵」を見て、次のようにその拝見記を書いている。

かもの繪 始而拝見申候 筆きそうなり。一段うつくしききぬにて候

筆こまかにかき申候。男鳥也。右繪也。かもかへりをさしたるところをかき申候。

一段しつかなる繪にて候。ひうし 一段うつくしく候 いん二つあり

宗及がこの時見たのは右絵であるが、それから十一年後、天正九年十月十日朝、錢屋宗訥・平野道是と共に、平野宗恵の茶会で左絵を見ている。その時の印象も十一年まえの右絵の場合と同様であった。

此繪左也、はかた宗壽所持候かたかた也

始而ノ茶湯也、繪一段静ナル繪也、キヌナトモ一段

コマカニ見エタリ、鴨ノ足ヲ一方ハアケテ、アシサキヲ

サケタルヤウニ見エタリ、

こうした評語的記述を『宗及茶湯日記』他会記から幾つか抄出しておこう。

永禄九年正月十九日……「萬里江山拝見、此繪玉潤也……惣別、にきやかなる繪也……」

同十二月七日朝……「始而客来一味拝見申候、繪よこ繪也、かぶらハなく候、島より引ぬきたるやうに見へ申候……」

永禄十年二月十七日晚に……「月繪拝見申候……此山はまへ江見え不申候、かすみにまきたるやうにかき申候……」

同二月廿六日……「はかた紹安之繪也、市繪拝見申候、右繪也……惣別、此繪一段すみくろなる繪也、にきやかなるか、屋たいのまハリいそかハしきやうにかき申候也、昏新候也、けたいには

山市晴嵐、かやうにかき申候……」

永禄十一年十二月十日……「すいせん花之繪、始而令拝見候、此繪右繪也……此繪にきやかなる繪なり、くろきすも所々あり……」

永禄十二年正月十日朝……「かもの繪 始而拝見申候 筆きそうなり 一段うつくしききぬにて候 筆こまかにかき申候 男鳥也 右繪也 かもかへりをさしたるところをかき申候 一段し

つかなる繪にて候……」

永禄十三年十一月十六日朝……「なみの繪拝見申候、繪の右よりかきいたしたる繪也、なみのくろきすみ一すちあり、そのほか

はうすきすみ也、しほけむりのやうなるものあり……惣別、此繪あさあさとしたるうちに、てまをいれてカキタル也、あまり

にこひたるものにてハ無之候……」

さて、山根有三氏は、「等伯研究序説」に於いて次のように述べ

ている。

「等伯画説で絵の鑑賞史上最も注意すべきは、

辰卯月二十六日二塚宗恵来 是ノ梁階カ柳鳥ノ繪ヲ見セタレハ

嗚呼しつかかな繪ニ有御座トほめたり 一言ナレ共面白ほめやう

也

といふところで、既に福井利吉郎先生を始め先人も指摘された。等伯はこの〈静かな繪〉といふ評に感心して、その後で、へしづかな繪へいそがわしき繪の概念によって八景の図をわけている。……等伯に〈静かなる繪〉といふ名言を教へた塚宗恵は、利休の女婿千紹二の父と云われ、宗及や宗湛とも親しい水落宗恵のことが考えられる。水落宗恵はこれらの人と堺や京の茶会で活躍しているが、河内の平野出身ともいわれるので、徽宗の鴨繪の所持者平野宗恵と同一人と思われる。そうすると、この宗恵の〈静なる繪〉といふ評は、宗及が自己の繪について言ったのを援用したことになる」と。

しかし、水落宗恵と平野宗恵とは別人である。宗及は、天正七年十二月七日期、水落宗恵の茶会に招かれたのを始め、同年十二月十一日朝には光明院康因とともに宗恵を招いており、その後も度々交流を繰り返している。しかし、宗及が平野宗恵を訪れた天正九年十月十日朝の茶会には「始而ノ茶湯也」と記され、平野宗恵に初めて招かれたことが判る。平野宗恵は、河内平野の町衆で、太田屋宗恵のことである。従って、水落宗恵と平野宗恵とは別人であり、日通上人の絵を見て「静かなる絵」という水落宗恵の評語は、宗及が記

した「繪一段静ナル繪也」を援用したことにはならない。しかも、この評語は茶会記に記されたもので、茶席で話題にされたかどうかは判らない。

山根有三氏は更に続けて、次のように述べている。

「等伯はこの言葉に感心して、〈雪ハしつかなる物ナレバ尤也〉とし、八景の内の瀟湘夜雨・遠寺晚鐘などはへしづかなる物ソへシと考へ、更に〈惣雨月ナトハしつかなる物ソ〉と発展させた。宗及は雪の絵だから静かな繪とは言わないし、玉潤の雨夜についても〈おもひのほかにかびぬゑにて候。一段こびたるやうにてこびぬ繪なり〉と非難している。これから考えると、等伯は宗及の鋭い印象批評を概念化した嫌ひがあるといへよう」と。

松下隆章氏は論考「嗚呼しづかなる繪」に於いて次のように述べている。

「等伯畫説にある〈嗚呼しづかな繪〉の一句は、我国では数すくない評畫の言葉として、鑑畫史上注目すべきものであるが、この言葉は曾つて畫説（昭和十六年六月号）に於て脇本楽之軒氏が著名な總見院の傳牧溪筆芙蓉圖にあてはめられ、更に田中倉琅子先生が三田文學（昭和十六年十一月号）に於て〈南唐の落墨花〉を説く際同じくこの芙蓉圖に就いて楽之軒氏の説を支持されて以後殊に美術史界で有名な言葉となった……。

例へばこの〈へしづかな繪〉といふ言葉も、等伯畫説の中にあるため、恰も等伯がいった言葉のやうに脇本楽之助氏も書いて居り、そ

の結果世間ではそう解しているものも多いが、實はこの言葉は等伯畫說の中の等伯の意見でないもの一つであると思われる……この一段は堺の宗恵が本法寺に日通上人を尋ねてきて、席上梁楷の柳鳥圖を見て「嗚呼しつかな繪」とほめたことに就いて、日通上人が自分の意見と共にそれを記載して置いたものと考えられ、特にこれに等伯が関係していた様子はないようである」。

松下隆章氏も水落宗恵と平野宗恵とを同一人物と見做して「宗恵は自己の所有の鴨の繪が、当時の大先輩宗及から「一段静ナル繪」と激賞されたので、彼にとってこの言葉は恐らく四五時中忘れ難いものとなっていたのであろう。その頃丁度本法寺に行き、雪のふるなかを柳の小枝に鳥のとまっている梁楷の繪を見せられて、「嗚呼しつかな繪に有御座」といったのは、繪が実際にそうであったかどうかは別問題としても、宗恵がこの言葉を使った心中は理解出来るやうに思われる。……

繪が實際そうであったかどうかは別問題といったが、これは今日梁楷のこの繪が見られないから何とも云えないが、然し畫說の記述をみると、「此繪枯木ニ雪ノフリテ小鳥ニハかかみ居タル所也、雪ハしつかなる物ナレハ尤也」とあるところから考えて、この静さは雪の静けさに關係してゐるやうである」。

『等伯畫說』中で使用された形容詞について、山根有三氏を始め当時の美術史家たちが様々に論議を展開したが、こうした形容詞については、茶の湯の世界では既に天文十八年（一五四九）以降津田

宗達や津田宗及たちによって特別な言葉としてではなく、既に記したように、日常の言葉として特に茶の湯の世界で頻繁に使われていた訳である。

こうした現象は、絵画の面からばかりではなく、あらゆる領域に亘って生じている。ここで『天王寺屋會記』を採り上げ、そこに示された拝見記の形容詞を検討してみよう。

『天王寺屋會記』

『天王寺屋會記』は、堺の町衆、天王寺屋三代（宗達・宗及・宗凡）にわたる自會記と他會記（他所茶湯留）とからなっている。宗達の自會記は「茶湯客來之事」、他會記は「茶湯并唐物拝見之事」、宗及の自會記は「客人之留日記」、他會記は「他所々茶湯留」、宗凡の自會記は記されていない。他會記は「方々御茶湯留」となっている。

『天王寺屋會記』は、天文十七年（一五四八）十二月六日朝から始まり、元和二年（一六一六）十一月十日で終わっている。六十八年間にわたる茶湯日記である。この會記は安土桃山時代を完全に包み込んだ記録であり、極めて貴重な茶會記である。

津田宗達は、永正元年（一五〇四）津田宗柏の惣領として堺に生まれ、宗柏は室町時代の町衆で、後の豪商天王寺屋の基礎を築き、堺の初期豪商文化を築き上げた人物であった。宗達は弟の道叱・宗

閑とその一族の了専・了雲らとともにその組織を強固なものとして、天王寺屋財閥を築き上げた。つまり堺の町で躍進した新興財閥となつたのである。宗達の生れた頃は、侘び茶の萌芽期であり、『天王寺屋会記』を書き始めた天文十七年頃は、町衆茶の湯の開花期であり、町衆文化の最も華やかな時代であった。特に最新流行のわび茶の湯は、町衆文化の精華であった。

宗達は、商売に精を出しながらも、茶の湯の世界でも活躍していた。茶の湯の指南は父宗柏から受け、堺の茶の湯の発展に大きな功績を残した。

「堺津田宗達、莖子ノ殿一世樂人也 名物卅色ノ上アリ」(『山上宗二記』)と記されている通り、牧溪筆船子の絵、北野茄子など数多くの唐物道具を所持していた。

宗達の記した茶の湯他会記は、「茶湯并唐物拝見之事」とあるように、唐物道具の拝見とその印象を書き留めた会記であった。当時の堺の町衆の実力は、さまざまな面で飛躍的に増進していた。当時の代表的な茶人は武野紹鷗と津田宗達であった。紹鷗は宗達より二歳年上であり、山上宗二から茶の湯の名人と称された人物であるが、その茶歴においては宗達のほうが先輩であった。堺の町衆の多くが茶の湯を楽しみ、その交流は盛んであった。当時の茶道具は殆どが唐物であったが、その道具の鑑識や批評を求めて多くの茶人(商人)たちが宗達を訪れていた。

天文十九年(一五五〇)四月十七日、武野紹鷗の使いの者二人が

宗達を訪ね、新田肩衝を拝見して貰っている。宗達はその拝見記を次のように記している。

一 カタツキ、にった、袋かんと、さ(し)まかうし心在、
くれな牛の尾(緒)

右

一 なりハ、つつきりと在、くひたちのひ候、ふたりとしたる
心有也、かたもきうにハつかぬ也、むくりと有敷、

一 土、うす白きやうにて、さらりと在、されども、しるりと
有也、

一 葉、地葉うすくろく、るり(瑠璃) 心いささかほと在敷、
みる色心も有也、上葉面に在所、其葉にて面へ二筋なたれ
在、壺の左の方へねちたる也、かた(肩)みしか(短)に
なたれ在、なたれのすちのふちに、二筋なから、しゆ(朱)
をやき出候、葉たかたかともまり候、わきへも葉いささか
程ましり葉の心有敷、

(新田肩衝のなり(形)は、つつきりと在、頸は立ち伸びており、ふたりとしたところがある。肩も急にはつかない、むくりとあるようだ。土は薄い白色のようで、さらりとしている。しかし、しるりとしている。釉葉は、地葉は薄黒く、瑠璃色かかっている。暗緑色と思われる部分もある。上葉の面にはなだれ釉が二筋あり、壺の左の方へ曲がっている。肩の部分に少しなだれ釉があり、そのなだれ釉の縁に二筋朱色が出ている。釉葉は高いところで留っており、脇

の方へも少しずつ下がっている所がある。二筋のなだれ袖葉の先に少しばかり他の袖が混じったように見える所がある。

天文十九年壬五月二十六日には、松本宗不が持参した北野茄子茶入を拝見し、その拝見記を次のように記している。

一 なり、つきりと在、すそにてふたりと有心そと有敷、ころハすこしちいさき也、すち(筋)こし(腰)よりちとさかりて有、

一 くちひろく在、ひねりかへしもうつくしく在、

一 葉しやかつ(蛇褐)心也、口のきわへも、殊更しやかつ葉有也、下葉よし、とまりもころよし、ふるまひたる葉也、

石間うらおもてに在所、石間一方之面と成也、

一 土、中分敷、こいアサキ心也、一段黒もなし、しゅ(朱)なし、土にはけめきりりと在、

一 葉の心、惣別、地之心、土こまかにてよし、

一 袋、かんとう、よこ筋に成也、アサキのお(緒)也、うらちや北絹也、天下か子与一と申者ぬい候由申候、同家きり

(桐)の文在、此壺の口付、惣之なり、つくもかミのなすひに似たる与松本宗不申候キ、そとも違ぬ由申候、大き

ハ、筒のふとさ、ゆひ一ツほと此つほちいさき由申候、

(なり(形)は、つきりと在、裾にふたりとした感じの所が少しある。ころ(大きさ)は少し小さい。筋が腰より少し下がった所にある。口は広く、捻り返しも美しい。袖葉は蛇褐色の感じがする。

口の際にも蛇褐袖がかかっている。下葉も良く、良い状態に留まっている……九十九髪茄子に似た茶入である、と茶入を持参した松本宗不が云った。少しも違っていいいと云う。

これらの道具の様子は、「つつきりとした形」「ふたりとした心」「むくりとした肩」「土は薄白きやうにて、さらりと在、されども、しるりと有也」「ふるまいたる葉」等々、宗達独特の表現で記されている。宗達は道具を見たときに感じた自分の心(気味)を表現したのである。

宗達は、この他にも伊勢山田の幸福屋の持参した牧溪の鶴鶴の絵、竹田与四郎の持参した舜拳の寒梅(右絵)、牧溪のりんこの絵などの鑑定を頼まれ、それぞれの拝見記を記している。宗達の鑑識眼は定評があり、堺の町衆から一目置かれていたのである。

宗達の代表的な評言を列挙しておこう。

茶入

* 肩衝、腰にすち一筋在、葉一色也、なたれ一筋在、葉高々とまり候、土薄墨也、さらりと候、居くひ(び)也、ちと口うす也、くたけ候、平くハなく候、

* 茄子の壺、壺の葉一色也、葉はつれ(外)に、そと村雲立様成心在敷、こし(腰)のとをりよりも少しさかりてすち(筋)在、口うす也、土一段こく(濃)もなし、しゅ(朱)などもなく候、かた(肩)にそと葉のはけたるやうなるうすき葉在、其

下に小さかりて石間在、惣別、土うす成壺敷、口せハき壺也、
* 円座肩衝、口立のひ(伸)候、葉一色也、面二そとうハくす
り在、つつきりとして、すそふたりとしたる壺也、土よく候、
一方二しゆ(朱)そと在、色うすきしゆ也、

* 肩衝壺……右かたつき壺、すはりとしたるつほ也、くすりふ
るまふ(振舞)たる心在、下葉うすかき(柿)心敷、土も能候、
口立のひたる心なし、大かた(形)にもなく、比能候敷、

* 肩衝……右かたつき、土中分也、さらりとしたる心在、

* 肩衝、につた(新田)……なりハつつきりと在、くひたちの
ひ(頸立伸)候、ふたりとしたる心有也、かた(肩)もきうに
ハつかぬ也、むくりと有敷、土、うす白きやうにて、さらりと
在、されども、しるりと有也、葉、地葉うすくろく、るり(瑠
璃)心いささかほと在敷、みる色心も有也、上葉面に在所、其
葉にて面へ二筋なたれ在、壺の左の方へねちたる也、かた(肩)
みしか(短)になたれ在、なたれのすちのふちに、二筋なから、
しゆ(朱)をやき出候、葉たかたかとまり候、わきへも葉い
ささか程つつさかりたる所有也、二筋のなたれのさきに、いさ
さか程ましり葉の心有敷、

* なすひ壺……小壺、両方二石間アリ、すち(筋)さしざかり
候、土ざらりと有心候敷、上葉そとかかり候、かた二葉切のそ
と(少)在、ひねり返し一入候、

* なすひ、つくも(九十九髪)……右御壺、葉一色、けくくミ、

候、なりひら(平)りと在敷、たちすき、盆ツキ一入二候、土
ヨシ、アサキ(浅黄)心・紫心の所少在敷、しゆ(朱)二方ヨ
リやき出候、そこすれハ三方二在、すし(筋)一とをり在、少
さかり候、三分一ほとすちきえ候、それをよろひ(鑑)のあひ
にてすれたるなと申敷、惣之つくり、ろくろ造敷、くひきわ、
そとおし入候、つゆさき(露先)にそとしゆ(朱)をさし候、
とまりハくろき葉のやう二候、

* なすひ……土そと(少)高下在、土そとうすこうはい(薄紅
梅)心二しらけ(白氣)心在、一段土こまかにもなく、帶少さ
かり候、

* 則祐肩衝、土くすりよし、但、なたれ色二葉アリ、かた(肩)
にすし(筋)のやうに色くすりり在、かた(肩)ハきつとハつか
(衝)す候、そのつちも、そ(少)と物にすれたるやう二見
え候、判もなく候、

* 天目、葉色あさき心也、下葉白シ、土ヨシ、そこひらりとア
リ、茶置之所くつろき候、比ヨシ、なりヨシ、台ハ少小かた二
候、あつあつと見え候、なりヨシ、ふくりん(覆輪)あたらし
く候、うるしの色打て、こうかけり候敷、

* 茶碗……きさミ六ツ、同へら在、内へおし入、土うすむらさ
き、色ハ白ケ心也、土あら也、ひらりとしたる也、

* 船の花入……そりやうハさのミそらす、そこむくりと有敷、

茶会記は、既に記したように、茶会の日時・場所・席主・客名を記し、当日使用した道具や料理を列挙するだけでなく、その茶会の雰囲気や有様なども読み取ることのできる記録である。茶会記には、自会記と他会記とがある。自会記は自分の催した茶会であるから、前もって書いておくことも、後になってから記すこともできるが、他会記の場合には自分の記憶力だけが頼りで、時にはメモのような形でそっと心覚えに控える場合もあるが、茶室で講義録をとるように、道具の種類・寸法・色合いなどを記すことはできない。従って、帰宅後、その日のうちに、時には翌日、忘れないうちに整理し、茶会記の体裁に記録しておく必要がある。先に紹介した『宗湛日記』には、「コノ数寄ノ飾、付落也」「此数寄ノ飾、付落也、但手水ノ間、鏝無ウス板ニスワル、小車生テ」などと云った記載事項がある。これは当日の茶会記の記録もれである。後日茶会記の整理をした段階で記憶に残っている事項を付け足したものである。

当時の茶人にとって、唐物道具の目利は重要な要件であった。

古今唐物ヲ集 名物之御殿リ全ク数寄人ハ大名

茶湯ト云也 又目聞ノ茶湯モ上手ニテ

世上數寄ノ師匠ヲ仕テ過ル身ヲハ

茶湯者ト云 又侘數寄ト云ハ 一物モ不ル

持夕者 胸ノ覚悟一ツ作分一ツ手柄

一ツ此三ヶ條調ル者ヲ云也 又唐物モ

持子 目モ聞 茶湯モ上手 右ノ三ヶ條モ

調リ 一道ニ志深ケレハ名仁ト云也 (『山上宗二記』)

津田宗達は台子の飾りを生涯楽しみ、名物の唐物道具を三十種所持した目利であった。宗達が堺の人々から頼まれて目利をしたこと、またそれを茶会記に記していたことは既に記したとおりであるが、宗達の記録には宗達独特の表現が用いられている。各道具の様子・持ち味・雰囲気までも記録されている。道具の醸し出す独特の味わいを自分なりの言葉で様々に表現している。それは美術家や芸術家が使う専門の評語ではなかった。

津田宗及の場合も同様であった。

津田宗及は、その出生は不明であるが、天正十九年(一五九一)四月二十日に亡くなっている。天王寺屋の宗達の惣領として生まれ、若い頃から茶の湯と連歌を好み、宗達のもとで茶の湯の修行をし、堺町衆の茶湯者として活躍していた。その実績は、宗及の残した茶会記で充分である。

宗及は、永禄八年(一五六五)から天正十五年(一五八七)に至る他会記と、永禄九年から天正十三年に至る自会記、更に永禄九年から元龜三年(一五七二)に至る道具拝見記を記している。この道具拝見記は、宗及が見た道具の備忘あるいは鑑定のために詳述した記録で、当時の名物道具の集大成ともいえる貴重な記録である。

これらの記録は、茶会の記録としてばかりではなく、織田信長から豊臣秀吉に至る桃山時代の歴史的事実を探るうえでも重要な資料を与えてくれる。

宗及の茶会記は、道具の拝見記が宗及独自の美意識に基づき、宗及独自の言葉で詳述されている。特に宗及の茶道具への価値判断を示す言葉は、現代の使用法と大分異なった意味で使用されており、正しく認識することが困難な場合がある。特に抽象的な語句で示された場合には、何となく判るような気がしても、具体的に表現することはできない。

例えば、永禄十三年四月二十三日昼、納屋宗久の所で拝見した台天目は、

ふくりんうつくしく候、色さひ色也、さひ色のやうに候へ共、

こつきりとハなく候

ぬまめくやう二候……ほうつきのふくりんニきす(痕)むかう

て(蜈蚣)ニツあり、うるしハくろくうきうきと候

元龜三年正月朝、満田宗春の所で拝見した飯胸は、

……土あかく、つくろきやう二見え申候、土のころもしるり

とハなく候、かわきころあり、えんざ(円座)あつく候、土

色もうつくしく候、こまやかにハなく候、葉のはたへも、ちほ

ちほとしたる、ふしくりたちたるところあり……

天正九年十月七日朝、祐長宗味の所で宮内卿法印と共に拝見した

玉かき文琳は、

……カタツキ、スコイタルナリ、口ノツキヤウ、事外ネフトニ

見ヘタリ、口ノ上ソキタルヤウナル躰、及(宗及)文ニ同前ナ

リ、但、スクニ見ヘタリ、土能候、是ハ及文ニ似タリ、ソコモ

糸切ナリ、朱ヲ焼出シタル敷ト見ヘタリ、少其心アリ、葉不可

然候、カタメナリ、色々チケイ(致景)アリ、タタ(只)天目

ノワルキ葉ナトノヤウニ見ヘタリ、面トカツキト見ヘタルトコ

ロモナシ、サヤウノトコロムサトシタルナリ、但、色ノソコハ

キメ(黄目)ニ葉コマカニ見ヘタリ、上葉ニムサト黒色在、何

ニ而モ葉色能モナシ、ナタレナトモカツキトハナシ、色々ニラ

ン(乱)シタル躰ハカリナリ、壺ノツクリヤウ、土アツニ、イ

カニモツヨク見ヘタリ、ヨシコミタル所モアリ、又フクレタル

所モアリ、葉ノケククミヤウナトヨキホト(程)ナリ……

等々と記され、各道具の様子、持ち味を想像することはできない。

特に抽象的な表現が随所に使用されており、その言葉の意味を明確

にすることは不可能に近い。

山上宗二は、著書『山上宗二記』で

こひた たけ多 侘堂 愁た

ひえた 登うけた 花やかに

作者 物知 花車につよく

右十ヶ條之内 能心得たる

仁を上手と云

と記し、この十ヶ條の精神を獲得した人を名人である、としている。

『山上宗二記』は千利休の秘伝書であるが、右の十ヶ條は道具鑑

賞の感どころを授けたものである。

津田宗及は牧溪筆船子の絵をはじめ、多くの名物道具を所持した

茶湯者であるが、織田信長の唐物道具を始め、数多くの唐物を拝見し、その道具の味わいを知悉していた。拝見した道具については極めて詳細に感じ取ったまゝを記録した。従って、様々な修飾語を使うことになった。「ケククム、コヒタ、タウケタル、シホラシク、ソサウナル、花ヤカ、ヌルキ、コツキリ、ヌルメク、シホラシ、フシホ、等々」の評言が随處で用いられている。こうした言葉の中でも、特に宗及は、茶の湯の美的な基本を「こびる」に置いて自分の美意識の根本としているようである。つまり宗及は茶の湯道具のあるべき実態、侘び茶道具の特徴を示すひとつの言葉として、「こびる」を頻繁に使用している。こうした抽象的な語句の正しい認識は極めて困難であるが、平面的、外形的な美しさから内部にまで沁透った深い美を求める態度、これが当時の侘び茶人たちの求めた真意であった。

「こびる」は、これまで現代用語の「媚びる」と同意義であると解釈され「相手の歛心をかうために、艶めかしい態度をする」(『広辞苑』)、つまり、「艶めかしい美しさを感じさせる」語として適応させた。従って、宗及の記した「こびる」道具が、逆の内容を表すことになり、前後関係がうまくいかなくなってしまった。

「こびる」は、室町、桃山時代では、「事物が、それに接する人を魅了する、成熟した美しさや趣をみせる。ある事が、それ自身の中に、人の心を満たすようなある雅致、すなわち、特性をそなえている。言動などに、人の気をそらさない、いかにも事情を心得たよう

な、気のきいた様子を見せる。事物が、その形状や言動などの上に、いかにも長い年月を経てきたという様子、また、老成した様子を見せる」(『時代別国語辞典』室町時代)、つまり、「古美る」と云えそ
うな、時代のよさを感じさせる言葉であった。

『山上宗二記』では、「誠安外之御覚悟ニ古美タル御遊ハ茶湯ニ過タル事ハ有間敷ナト申上……惣別古美タル壺ニテ候ト云々……コヒタル覚悟一世ノ間持人也」等と記されているが、宗二の使用した「こびたる」とは、「(あるものに相応しく) 重厚な、深みのある、或は、そういう美しさを持った、という純粹の和語」である(高橋久子著「国語学見地より見たる『山上宗二記』」)。

例えば、永禄十二年二月二十八日朝、紅や宗陽の所で草部屋道設と共に見た紅屋肩衝、

此かたつき、始而見申也……ナリ一段ヨク候、コロモヨシ、中ヨリハ小カタニ見ヘタリ、葉之色、絵ヤウ(様)ナトアシク候、土ハ中也、惣別、コヒヌ壺也、

永禄十二年三月二十三日朝、武野宗瓦にて、

夜雨絵、但、きぬや二候つる、あをかいて(青楓)豊州の屋かた江下申時、

ひやうし(表紙)上下きんらん、……ふうたい一文字むらさきのこもん、

絵おもひのほかにこひぬえ(絵)にて候、一段こびたるやうにて

こひぬ絵なり、

同年十一月に十三日朝、千宗易にて、

つるのはしの花ひん、始而拝見申候、

右しとう（紫銅）のもの、かね一段うつくしく候、うつくしきハかりにて、こひたるかねのいろハなく候、たけ（長）一しゃく二すこしみしかく候、わ（輪）いとそこ、たたみのめ四ツあり、口こゆひ（小指）のさきやうやういり申候、此花ひん、惣別、こひたる物にてハなく候、いふう（異風）なるハかりにて候、うつくしくはなやかに、いふう二見え申候、乍去よわきやう二ハ見え不申候、

（紅屋肩衝の形は大変に良い、大きさも良い、中位よりすこし小さめである。釉薬の色や絵模様などはあまり良くない、土は中位である、全体的に見て、コビヌ壺である。つまり、長い年月を経たという様子、成熟した趣の感じられない壺である。

瀟湘夜雨の絵は、おもひのほかこひぬえ、一段こひたるようにてこひぬ絵、つまり、想像していたほど「こび」てはいない絵、長い年月を経て、古くなり、その味わい深い様相を呈しているようには見えるが、良く見るとこびていない絵である。

鶴嘴の花瓶は、紫銅のものである。そのからかねの色は大変美しい。美しいばかりで、古びた趣、成熟した美しい趣は感じられない。丈は一尺に少し足りない程である。底は輪糸底で、暈四目の大きさ、口の大きさは、小指がようやく入る程度である。全体的に見て、成

熟した美しい趣のあるものではない。）

津田宗及の道具鑑賞の態度は、父親宗達の影響によるものであるが、宗及の豊富な批評語彙は、堺の町衆を始め、僧侶・連歌師・能役者など多様な人物、特に連歌師紹巴との交友によって得られたものである。形式に捉われず、自分の感じた印象を特別な評語を使うわけでもなく、自分の言葉で表現しているのである。これは、美術評論家たちが批評する言葉、「悠揚迫らず」「規模広壯、気格雄偉、観る者をして筆端神あるかと疑はしむ」「布局秀拔、落筆緻密……」「逸品画風的な減筆体の人物画……」等々とはまるでかけ離れた表現である。

ここで名物「付藻茄子」の茶入を探り上げ、同じ茶入を見た宗達と宗及の道具の見方、表現の仕方などを比較検討してみよう。

「付藻茄子」は、漢作唐物茶入で、村田珠光がこの茶入を九十九貫で手に入れたことから、九十九髪とも云われている。『山上宗二記』では、このつくも茄子は織田信長公の時代に京都の本能寺で焼失した、と記され、その様子が次のように記されている。「この茶入は、内赤盆に据えられており、金襴の仕服に入っている。このつくも茄子は村田珠光によって見出され、東山御物となった茶入である。その後、この茶入は方々を転々としたが、越前の朝倉太郎左衛門が五百貫で買い取り、所持していた。それから、越前の城下府中の小袖屋がこれを千貫で買いうけた。加賀国に一向一揆が起こった時、小袖屋はこの茶入を京都の袋屋に預けて置いた。ところが、袋

屋はこの茄子茶人が天文法華の乱(天文五年)の折りに消失してしまつたと言つて、小袖屋に返そうとしなかつた。そのことを知つた松永久秀は、姦策を弄して、この茶人を自分のものにしてしまつた。久秀はこの茶人を二十年間所持していたが、その後信長公に献上した。

この茄子の茶人は焼失してしまつて、現在では拝見できない名物であるが、侘び茶の湯の雑談のために記しておく。昔の人は、つても茄子の茶人は土・釉薬・形・大きさ・口造りなど、すべてにわたつて天下一の名物である、と称賛していた。」

つくも茄子は、本能寺で信長とともに焼失したと伝えられていたが、信長の没後、秀吉の所有となり、大阪城の宝庫に収められていた。しかし、元和元年の落城で行方が判らなくなつてしまつた。徳川家康の命で藤重藤元、藤厳父子が焼け跡から新田肩衝、松本茄子など多くの名器とともに、つくも茄子を探し出し、漆繕いをして家康に進上した。家康は、その褒美として、藤重父子に松本茄子とつくも茄子を与えた。従つて付藻茄子は現存している。

津田宗達のつくも茄子の拝見記

右御壺、葉一色、けくくミ候、なりひらりと在敷、たちすき、盆ツキ一入二候、土ヨシ、アサキ(浅黄)心・紫心の所少在敷、しゆ(朱)二方ヨリやき出候、そこすれハ三方二在、すち(筋)一とをり在、少さかり候、三分一ほとすちきえ候、口そとうけ候敷、ひねり返し能候、石間之様二見え候所在、それをよるひ

のあひにてすれたるなと申敷、惣之つくり、ろくろ造敷、くひきわ、そとおし入候、つゆさきにそとしゅをさし候、とまりハくろき葉のやう二候、

津田宗及のつくも茄子の拝見記

此壺なりひらめに見え申候 ころ大かた也 土あまりこまやかにハなく候 葉色あかくろく候 右此つほおもひのほかにくすミたるつほ也 おもてのなたれハ なたれなどのやうには見え申さす候 くすりにしミたるやう二見え申候也 盆つきにて薬とまり候 なたれの左右にくすりらん(乱)したるところあり石間ハ面のつほ右方二あり わきよりハすこしうしろのかた二あり 色くすりハ少かすはけたるやう二見え申候也 くすりうすきやうなり 土しゅ(朱)したたかにいたしたる也 但なたれの右方二あり そこハはいときりまろく あり 一段土あつ二見え申し候 口つくりうけたるやう二あり ひねりかへしあり うちへハくすり少かりたるなり 石間とおほしきところは すこしうへ江たかくありあかり申候 乍去 めにハたち不申候 かたより 石間 ゆひ一つおき候て ほとした二有之 おひ(帯)ハすこしきかり申候 かたすこしつき申候 かたも中たか(高)なるやうに見え申候 おひ(帯)ハ一すちあり つほ はけたかにハ見え申さす候 口なとハふたをつかまつり候へは 大なるやう二見え申候へ共 ひねりかへしか ひらりと御入候条 口のうちハせはく御座候 つほの年

は四十はかりなるものを見るやう二候 ぐすミたるとは見え申候へ共 又花やかなる所もあり ひねりかへしの方 少出入あるか 盆つきハすき申候 中時分よりの下にてはり申候 つほの中時分より下之方ニ而こしはり二見え申候

此御つほの上にてても 土などハおかしくもなく候敷 石間なども ねかハくハ よくもなし 此石間 土などニ御座候ハハさのミめにハたち申ましく候へ共 葉の中ニ依有之 相当つかまつらぬやう二見え申候 乍去 此石間ハ ひま(火間)ともむかしより申伝候 又、有説にハ 山な殿くそくのそてにつけられてきすかつきたるなとも申伝候 菟角さやうには見え申さす候 つほのむま(生) れつきにて御座候 惣別 此壺 すこしもいやしきやうにはなし あまりにあまりにくらいありすきたるやうには見え不申候……

津田宗達がつくも茄子を拝見したのは、永禄三年二月二十五日朝、三好長慶の家臣松永久秀の大和信貴山城であった。それから約九年後、永禄十一年辰十二月之戌之刻に木津屋宗左衛門のところへ宗及が同じ茶入を拝見したのである。

宗達は、道具を見たときに感じた心(気味)を表現するために「つつきり」「ふたり」「むくり」「さたり」「しるり」等々、さまざまな語彙を駆使している。これは宗及の場合も同様であった。中世から近世に至る諸芸能の基盤となつて大きく作用した「観」は、「日本的なもの」の大きな特徴をなすものであるが、個別的な事柄

を通じて、その背後にある目に見えない、より普遍的な、永遠的なものを見ることである。当時は、「心で見ると」と言われ、茶湯者の鑑定(目利)の仕方であった。

つくも茄子は「ぐすミたるとは見え申候へ共」よく見ると「又花やかなる所もあり」、あたかも「年は四十はかりなるものを見るやう二候」、茶器の姿が四十路あたりの人間の、ぐすんだようできて、花やかさも残っている様子に似ている、というのである。茶器は、人間と同じように生み出され、慈しまれて育ち、人の手になすむことと変化するものである。従つて、茶器鑑定の要点も脊、首、腰、肩、腰張りなど、人間の姿と形(なり)を云う言葉でその位置を確認している。

『茶会記』には、「おとなしく候」「いやしきつぼ」「タウケ(道化)タル心」「シホラシク見へ候」「うきうきと候」「きらめくころ」「けくくみたる(気張つた)」等々、人の生活の場で日常に見聞きする身体の動き、心の動きを語る言葉が、茶器や掛物を語るために使われている。こうした用語は、生命なき壺などに生命を与え、無限の美を発見する手立てとなり、感動となるのである。

宗達も宗及もともに同じ茶入を見ているのであるが、その見方、感じ方、表現の仕方には大きな違いがある。例えば「石間」(釉葉がかからず、土の生地のまま残つた斑点の部分)を採り上げ、その違いを見てみよう。

宗達は「石間之様二見え候所在、それをよろひ(鑑)のあひにて

すれたるなどと申敷」と簡単に記しているが、宗及の觀察記は詳細を極めている。

「石間八面のつほの右方二有り わきよりハすこしうしろのかたニあり……石間とおほしきところは すこしうへ江たかくありあかり申候 乍去 めにハたち不申候 かたより 石間 ゆひ一つおき候て ほとしたニ(脱字)有之……石間なども ねかかくハよくもなし 此石間 土などニ御座候ハハ、さのミめにハたち申ましく候へ共 葉の中ニ依有之 相当つかまつらぬやうニ見え申候 乍去

此石間ハ ひま(火間)ともむかしより申伝候 又 有説にハ 山な殿くそくのそてにつけられてきすかつきたるなども申伝候 兎角さやうには見え申さず候 つほのむま(生)れつきにて御座候……惣別 此つほ すこしもしやしきやうにはなし あまりニあまりニくらいありすきたるやうには見え不申候……」

この石間については、昔から足利三代將軍義満が陣中まで持参し愛玩したため、また山名宗全が肌身離さず持参したため、鏝でこすれてできた部分である、などと云い伝えられている。宗及は、これを火間(袖が切れて素地が現れた部分)であると訂正している。

ここで宗及が茶会記に記している掛物の絵と茶人の評言を列挙しておく。

掛物の絵

* 萬里江山絵(玉潤筆)……絵之内、ヤタイ(屋簷)絵ノ左方

二有之、山高キカニツ、ヒクキ(低)カニツアリ、船アリ、釣スル人形アリ、此舟ハ屋タイノ方へ入ルヤウニ見へ候、山タキタルヤウナリ、江ノ心モアルカ、惣別、此絵ニキヤカニミへ候、……にきやか(賑)なる絵也、

* 客来一味之絵(趙子昂筆)……カフラニナノツキタルトコロヲ書候……かふらハなく候、畠より引ぬきたるやうに見へ申候、昏上をつき(継)申候、客来一味とかきたる所、絵の右方二有之、

* 漁父絵(牧溪筆)……此絵、始而拝見、但、開也、船子ノカタカタ(船子絵と左右の対)也、……惣別、此絵さわかしき絵也、船ノ下ノ岩くミなど目ニ立候、船ニ釘目ナシ、人形蓑笠ヲきたる也、釣ニ心ヲカケテ、蓑笠うしろへのけたるやうニ見え候、

* 月絵(玉潤筆)……此山はまへ江見え不申候、かすみまきれたるやうにかき申候……

* 市絵……惣別、此絵一段すみくろなる絵也、にき(賑)やかなるか、屋たいのまハリいそかハしきやうにかき申候也、昏新候也、けたい(外題)には山市晴嵐、かやうにかき申候也……

* 水仙花之絵……此絵にきやかなる絵なり……

* 瀟湘夜雨……繪おもひのほかにかきぬえにて候、一段こひたるやうにてこひぬ絵なり、

* 花之絵……宗佐の絵などよりハせうせうと見え申候……

* 波之絵(玉潤筆)……惣別、此絵あさあさとしたるうちに、
てまをいれてカキタル也、あまりにこひたるものにてハ無之候……

茶入

* 肩衝……惣別、つほいやしきつほ也、口かたうす有、土よき
土也、

* 油屋肩衝……口ツクリ(作)ヨシ、薬色ヨシ、カタメ(堅目)
ニハナシ、一段ケクミタル壺ナリ、此壺一段コヒテハ不見候、
又タウケ(道化)タル心モナシ、何トモナクヨキ壺ナリ、茶湯
方ニ一入ニハ不見候、初心ナルココロハナシ……土はおもハし
くもなき色也、あさきニすこし紫のふくミたる也、へけ土ナリ、
惣別、此かたつき、えもん(衣文)あしく候、すきかたに(数
奇方)にはあまりほめぬつほと存候、なりなともあしくハなく
候へ共、あるかかりのなりにて、すき(数奇)いりたるやうな
るなりにてハ無之候……惣別、かたつき、ぬるきかたつきにて
候……

* 紅屋肩衝……ナリ一段ヨク候、コロモヨシ、中ヨリハ小カタ
二見ヘタリ、薬之色、絵ヤウ(様)ナトアシク候、土ハ中也、
惣別、コヒヌ壺也……

* 円座肩衝……始而拝見ナリ、トウヒク(胴低)ニ、ホタリト
アリ、比大カタナリ、土ヨシ、薬黒目ニ、ソコクリ(底栗)色
二見ヘタリ、ナタレアリ、円座ノ上マテ薬カカリテ、土ノ見ヘ
候所スクナシ、壺ノソコニテ、土ノ色ハ見ヘ候、口ノツクリ見

事ナリ、一段タウケ(道化)タル壺ナリ、

* 富士茄子……ナリヨシ、比ヨシ、土薬ソサウ也、ナタレアリ、
土ハサラリトアラ(粗)メニ見ヘタリ、口ツクリヨワ(弱)キ
ヤウニ見ヘ候……惣別ソサウナル壺也……

* 初花肩衝……なたれ三筋有、口ノつくりひら(平)りと有、
薬うすかき(柿)ニこいかき(濃柿)、うわくすりにかけたたり、
土紫色アリ、そこ(底)へけそこなり、くすりの色のうちにも、
土ニむらさきをふくミたるやうのころ(心)あり、薬一段う
るわしき也、壺ノウしろのはう、一段きれいに見ヘたり、くす
り(葉)けくくミたるやうにも、はけたかなるやうにも見ヘす、
よき比可申様もなく候、なたれかたみしかあり、かやうの事す
こし目ニたち申候、ナリモ、せいたか(丈高)きやうにハ候へ
とも、なれやうたる躰也、くち(口)ひくきやうにハ見ヘ候へ
とも、是もなれやうたる躰也……薬薄ニ、カワキ心ニ覚候、

* 投頭巾……へら四ツ有、浦の方へら一段ゆかミ申候也、面の
へらに、おしいれ(押入)たるやうなるところ有也、土少白色
也、一段こまかに覚申候、くすり黒候也、口のうちへも、くす
りまハリたる也、かたにつくろい有、ひねりうすく候也、くす
りこまか也、口立のひたる也、かたたれさか(垂下)りたる也、
上くすりと下くすりととのさかい、上くすり白色なるところ有、
かたにかたさかり有、いづれも惣別そさうに覚申候、口のすち
一段ふとく候、

* 肩衝……葉黒色也、何ニそそう二見え申候、土白色也……

* 鳩肩衝……かたつき大かたなり、黒色のくすりなり、土よく候、但、土ハよく候へ共、つくりやうあしきやうにつくりたる也、なりとうはり(胴帳)申候、かたまる(肩円)く候、色くすりおとし、かたにミな色くすりかかりたるなり、うちへもすこしかかりたる也、へら五ツあり、おしこみたるころあり、へらハみなゆかミ申候也、惣別、此かたつき、いやしきやうに見え申候、口なと一段つよく候也、そこわそこ(輪底)なり、口土ハあさきのこき土也、かたつき一段けくくミたるなり、つよきかたつきなり、

* 九十九茄子……此壺なりひら(平)めに見え申候、ころ(比)大かた也、土あまりこまやかにハなく候、葉色あかくろく候、右此つほおもひのほかにくすミたるつほ也、おもてのなたれハ、なたれなどのやうには見え申さす候、くすりにしミたるやう二見え申候也、盆つきにて葉とまり候、なたれの左右二くすりらん(乱)したるところあり、石間ハ面のつほの右方二あり、わきよりハすこしうしろのかた二あり、色くすりハ少かすはけたるやう二見え申候、くすりうすきやうなり、土しゅ(朱)したかにいたしたる也、但なたれの右方二あり、そこハはけめ(いとぎり)まろくあり、一段土あつ二見え申候、口つくりうけたるやう二あり、ひねりかへしあり、うちへハくすり少かかりたる也、石間とおほしきところは、すこしうへ江たかく

ありあかり申候、乍去、めにハたち不申候、かたより、石間、ゆひ一つおき候て、ほとしたニ有之、おひ(帯)ハすこ

しさかり申候、かたすこしつき申候、かたも中たかなるやうに見え申候、おひ(帯)ハ一すちあり、つほ、はけたかにハ見え申さす候、口なとハふたをつかまつり候へは、大なるやう二見え申候へ共、ひねりかへしかひらりと御入候条、口のうちハせはく御座候、つほの年は四十はかりなるものを見るやう二候、くすミたるとは見え申候へ共、又花やかなる所もあり、ひねりかへしの下方、少出入あるか、盆つきハすき申候、中時分より下にてはり申候、つほの中時分より下之方二而こしはり二見え申候……石間なども……さのミめにハたち申ましく候へ共、葉の中ニ依有之、相当つかまつらぬやう二見え申候、乍去、此石間ハ、ひま(火間)ともむかしより申し伝候、又 有説にハ、山名殿くそくのそてにつけられてきすかつきたるなども申伝候、菟角さやうには見え申さす候、つほのむまれ(生)つきにて御座候、惣別、此つほ、すこしもいやしきやうにはなし、あまり二あまり二くらいありすきたるやうには見え不申候、……

* 油屋肩衝……なりよし、ころよし、土なともかたつきのそうわう(相応)ほとなり、くすりもかたのことく候、上くすりかんにし申候、色はかき(柿)也、うハくすり黒色なり、つゆさき(露先)、以上三つほどあるかと覚候、土はおもハしくもなき色也、あさきニすこし紫のふくミたる也、へけ土なり、惣別、此

かたつき、えもん(衣文)あしく候、すきかた(数寄方)にはあまりほめぬつほと存候、なりなともあしくハなく候へ共、あるかかりのなりにて、すき(数寄)いりたるやうなるなりにてハ無之候……惣別、ぬるきかたつきにて候……

* 肩衝……惣別、かたつき、くすミ入たるやう二見え申候、くすミたるうち二いやしくハなく候……

* 紹珍なすび……なりまるみあり、比ちいさめ也、土よくもなし、葉かたのことく、口つくりうつくしく候、こゆひ(小指)はいり申候、かたに色くすりあり、なたれあり、そこいとときり、かたより下にて、色くすりちり候、かたに少ひひきたるところあり、惣別、此壺いつかた(何方)もさのミあしき所もなく、また一段能ところもなし、乍去、いやしきやうには見えス候、ウツクシキツホ也、サリナカラアマリニヨワキ所は無之候、葉の色あしく候、ぬめぬめとしたるやうに見え申候、葉のけけくみやうなどハ能比にて候、土のいろ黒色也……

* 円座肩衝……此壺トウヒク(胴低)ナリ、葉黒色ナリ、大かたニあり、イヤシキつほ也……

* 京極なすび……なり、比一段よく候、なりハまるみあり、ころハつくもかみなとよりハ少ちいさく候、葉色つくもに相似候、一段見事二而候、……ぬめぬめとしたる事ハ一向無之候、土あさき色、そこいとときり……一段うつくしく候、口つくりあり、うるしをへたとつけ申候、土なと人の手数ゆかす候と見え申候

て、一段きれいに御入候、

* 飯胴……なりせいひききやう二見え申候、比よし、土あかく、つころきやう二見え申候、土のころもしるりとハなく候、かわきころあり、葉色あめいろに一色なり、なたれ一すち、つほのうらの方にくすりのよこになたれたるところあり、円座あつく候、土色もうつくしく候……葉のはたへも、ちほちほとしたる、ふし(節)くりたちたるところあり、おひ(帯)あり、内へもくすりかかり候……

* 肩衝……とうひく(胴低)なり、口ひろし、土よし、くすりしふ(洪)いろなる葉ニむらたちたる所在、

* 則祐かたつき……土あかめなり、もへき(萌黄)のころこ(心)もあり、くすりくろめに……壺の面いつれそとおもふやうなるなり、

* 玉堂かたつき……なりかた(肩)すそ(裾)もなきやう二すく(直)二つたちたるつほ也、比ハ大かた也、土白ヶ心あり、葉黒色也、……つほの左之方ニむらたちたる葉あり、目二かかり候、……葉かためニミへ候、なしめ(梨目)なる所もあり……くすりよき比ニとまり候、少けけくミたるかたなり、

* 式部少輔肩衝……比ハヨシ、中ヨリハスコシ大かた敷、土モヨキ色ニ、ホツケリトアカミモアルカ、アサキココロモアリ、土カマカ也、葉黒色ニ一色ナリ、ウハ葉ナタレニナル也、ナタレスコシユカミ候、ツユサキ(露先)ニ色葉少アリ、ナタレ壺

ノワキノ方ニモ二ツアリ歟、葉少ハキタカ(脛高)ナリ、ナタレハソコマテサカリ候、カタノココロハムツクリトアリ、帯ハアカリ候、ヨヒアカリ少心ニカカリ候、口ツクリソサウニ見え候、ソコハツンキツタル(頭切った)ココロアリ、ヘケソコノココロナリ、

*飯胴……此壺カルク、サツトシタル壺也、コヒタル心ハナク候歟、ウツクシクキャシャ也、ハナヤカニハナシ、タウケ(道化)テツヨキココロハナシ、

*肩衝……ナリヨシ、コロ(比)ヨシ、土ワロシ、葉カタノコトク、口ノツクリ大ナリ、えんざ(円座)有、葉色一色ナリ、色葉モナシ、ナタレ一すちアリ、少なたれゆかミ申候……土之色ハ一段赤め也、しるりとしたる土也、土の心ハヨク候、葉モ一段さうニハ見え候へ共、面白葉ナリ、コシノ帯ナク候へ共、フシホニハナク(しおらしくない)候、惣別、此壺そそうニカルキ壺ナリ、葉サカリヨキコロナリ、

*木辺肩衝……ナリ能候……葉之色黒ク、イカニモコウ(濃)見へ候、面ナトハ一段シホラシク候、色葉もナク候、

*玉かき文琳……只天目ノワルキ葉ナトノヤウニ見へタリ、面トカツキト見へタルトコロモナシ、サヤウノトコロムサトシタルナリ、但、色ノソコハキメ(黄目)ニ葉コマヤカニ見へタリ、上葉ニムサト黒色在、何ニ而も葉色能モナシ、ナタレナトモカツキトハナシ、色々ニラン(乱)シタル躰ハカリナリ、壺ノツク

リヤウ、土アツニ、イカニモツヨク見へタリ、ヨシコミタル所モアリ、又フクレタル所モアリ、葉ノケケクミヤウナトヨキホト(程)ナリ、

*肩衝……口キワニスチナクテフシホナリ(しおらしくない)……惣別、少カタニワヒ(侘)タル壺也……

*小紫肩衝……濃柿ノ上葉カカリ候、葉スヘスへとアリ……

*木枯肩衝……葉ケケクミタルナリ、土ヘケソコ也、口ノツクリヨシ、ロクロアリ、ナタレ有、ツユサキ(露先)シヤカツ(蛇褐)心ノ葉アリ、比ハ中也……

*大茄子……葉一色也、比ハ半袋ヨリ茶入ヘク候、……一段ケケクミタル壺也

*このむらや(木村屋)肩衝……なりヨシ、比大カタ也、土ヨシ、葉一色也、黒色也、ナタレ面ニ一筋アリ、壺ノ左方ニ葉ノラン(乱)シタル所アリ、目ニ立候事ハナシ、葉ノケケクミヤウ中也、ハキタカ(脛高)ニモ、ケケクミタルトモ見ヘス候……口ノツクリヨク候、目ニハ不立候、一段シホラシクアリ……惣別、此かたつきソサウナル壺也、葉ノ内ニモサラサラトシタル地葉アリ……

*打曇大海……ヒライ壺也、土ヨクモナシ、葉ハナヤカ也、……ケツコウナル葉ノ様子也、乍去、コヒテ(媚)シン(真)ニハナシ、万歳大海ナトヨリハ平メニセイヒクク、惣別、壺少カタナリ……

* 富士茄子……土薬モそさう也、帯二筋アリ……

* 松本茄子……ナリ(形)・比言語道断也、土、赤目ノ内ニカ
ワキ心アリ、土ノコマカニモナシ、葉黒目也……薬ノケケクミ
ヤウ言語道断也……

(つづく)